

# 普及する腹腔鏡下手術

やまなし

## 医療最前線

《 36 》

県立中央病院から

体に負担の少ない手術方法として急速に普及している鏡視下手術。腹腔鏡や胸腔鏡を利用し、小さな傷で早期回復が期待できるとして、さまざまな病気に応用されている。県立中央病院でも患者の病態に応じ、本年度から本格的に導入を始めた。

肝胆膵外科科長の長堀薫医師によると、腹腔鏡下手術の対象となるのは、腫瘍の場所や進行度によるが、胆石、胃がん、大腸がん、腸閉塞、肝がん、膵臓の腫瘍、脾腫、副腎の腫瘍、診断のためのリンパ節生検など。同病院では胆石や早期の胃がんに対しては行われていたもの



長堀 薫  
肝胆膵外科科長

## 小さな傷、術後の回復早く

の、大腸、肝臓、膵臓、脾臓、副腎の腫瘍に対しては2010年度は4件、11年度はゼロだった。

昨年5月に日本内視鏡外科学会の技術認定医である長堀医師が赴任。積極的に腹腔鏡下手術を取り入れている。昨年4月から12月までに大腸がん・腺腫は計20件、腸閉塞3件、肝がん2件、膵腫瘍1件など、胆のう40

件を含めたすべての腹腔鏡下手術は9カ月間で88件となり、すでに10年度(47件)、11年度(34

件)を大きく上回っている。メリットは、従来の開腹手術と比べ①傷が小さい②痛みが少ない③出血量が少ない④術後の回復が早い⑤癒着を起こしにくい⑥入院期間が短いなど。さらに長堀医師は「腹腔鏡だからこそできる処置もある」という。

モニター上に患部を約10倍に拡大して手術を行うため、骨盤や横隔膜など体の深部まで観察することができ、精密な手術を可能にしている。

という。

ただすべての手術を腹腔鏡で行えるわけではなく、開腹手術の方がメリットのある場合もある。長堀医師は「患者さんの病状に合わせ、もっともよい治療法を提示したい」と話している。

県立中央病院で行われた腹腔鏡下手術 (件)

	2010年度	11年度	12年度(4~12月)
胆のう摘出	35	24	40
大腸腫瘍(がん・腺腫)	3	0	20
腸閉塞	0	0	3
胃がん	8	10	15
肝がん	0	0	2
膵腫瘍	0	0	1
脾腫	0	0	1
副腎腫瘍	1	0	2
リンパ節生検	0	0	4
計	47	34	88

第2、4木曜日に掲載します